

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K14	氏名	堀内 大介
研究主題 —副主題—	小学校体育科における若手教員のニーズに応じた援助の在り方 —援助の視点を整理することを通して—		
所属校	荒川区立第七峡田小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>(1) 背景</p> <p>若手教員の休職や早期退職が問題になっている。そこには、教育現場の多忙化と同僚性の喪失、教員バッシングといった問題に加えて、団塊世代教員の大量退職に伴う年齢構成の急激な変化から、若手教員であっても即戦力としての働きが求められる厳しい現実がある。こうした現状認識に立ったとき、明日の教育を担う若手教員の成長を支えることが喫緊の課題として意識される。中央教育審議会答申（2002）では、「児童に体を動かす楽しさを感じさせることができる指導が必ずしも得意でない」とする小学校教員が存在することが指摘されている。加えて、我が国の小学校教員のうち保健体育科の中学校教諭免許を所有している教員の割合は約7%であり（文部科学省、2009）、多くは養成課程において体育指導の専門的教育を受けていないことも問題と言えよう。こうした状況は、小学校教員の体育授業に対する力量向上という課題に取り組む必要性をクローズアップさせることになる。このようなことから、若手教員が体育科の指導に関して難しいと感じていること及び、必要としている援助について明らかにする必要があるのではないかと考えた。</p> <p>(2) 目的</p> <p>小学校における体育科の授業を充実させるために、若手教員のニーズに応じ、実際の授業で活かすことのできる援助の視点を整理する。</p> <p>(3) 仮説</p> <p>若手教員の体育科指導に関するニーズを調査し、実際に援助することを通して、効果的な援助の在り方を明らかにすることができれば、ニーズに応じた援助の視点を整理することができるだろう。</p>
II 研究の方法	<p>(1) 基礎研究</p> <p>先行研究、先行実践等の文献や資料から、小学校体育科における若手教員のニーズが多岐にわたる要因、若手教員が体育科授業研究に求める機能、若手教員が成長するために必要とする具体的な援助について研究を進める。</p> <p>(2) 調査研究</p> <p>若手教員が体育科の指導に関して難しいと感じていることや、体育科の指導が難しいと感じたときに受けてよかった援助や、どのような援助を受けたいかを調査する。</p> <p>(3) 実践研究</p> <p>若手教員が体育科の指導に関して難しいと感じていることを踏まえ、実際にニーズに応じた援助を行い、受けてよかった援助や、更にどのような援助を受けたいかを聞いてまとめることで効果的な援助の在り方について考える。</p>

<p><b>Ⅲ 研究の結果</b></p>	<p>(1) 基礎研究から</p> <p>(i) 小学校体育科における若手教員のニーズが多岐にわたる要因</p> <p>体育科は、学習指導要領及び学校体育実技指導資料において扱う教材は例示にとどまり、各地域や学校の状況に応じて自由度があることや、教科の中で唯一教科書が存在しない（保健は除く）ことなどが若手教員のニーズが多岐にわたる要因だと考えられる。</p> <p>(ii) 若手教員が体育科授業研究に求める機能</p> <p>若手教員が体育科授業研究に求める機能には、「同僚性・関わり」、「指導者からの評価」、「指導技術向上」、「教科内容追求」、「自己改革」がある。</p> <p>(iii) 若手教員が成長するために必要とする具体的な援助</p> <p>授業設計段階で体育の授業に関して若手教員が必要とする援助は、授業設計力に関する知識について援助することである。また、体育の授業に関する若手教員への援助は、若手教員が真似をしたり、工夫したりすることができるモデルを同僚が見せる、日常的な学校での援助という方法が効果的である。</p> <p>(2) 調査研究から</p> <p>若手教員の体育指導に関する印象、若手教員が体育科の指導に関して難しいと感じている領域、内容、どのような援助を受けたいかについて傾向をつかむことができた。</p> <p>(3) 実践研究から</p> <p>若手教員のニーズは、今指導している単元やこれから指導する単元にあること、知らないことをたくさん知りたいこと、気象条件や校庭、体育館の実態に応じた指導にもあることが分かった。</p>
<p><b>Ⅳ 考察</b></p>	<p>調査研究で分かったことを生かして、授業前・授業後に援助を行う際の視点を整理することができた。</p> <p>整理した視点に沿って実際に援助を行うことで、よりよい授業について一緒に考えることができた。若手教員は自身の体育授業がこれでよいのか、このままではいけないのではないかと不安を抱えていることが多い。このような状況の中で、授業を見て、よかったところや、もっとこうしたらよいのではないかとといったところについて援助することで、若手教員が意欲的に体育授業を行うことができることが分かった。</p> <p>今後は、体育科を専門としないミドルリーダーでも体育科の授業について援助を行うことができるような援助の在り方について検討していく。</p> <p>また、若手教員が意欲的に取り組めるような実技研修会の内容についても考えていく。</p>